



Title	<書評> 『Racism and Anti-Racism in Europe』
Author(s)	稲垣, 健志
Citation	大阪大学言語文化学. 2006, 15, p. 179-182
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77896
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Alana Lentin, *Racism and Anti-Racism in Europe*. Pluto Press, London / Ann Arbor, 2004.
ISBN: 0-74532-221-2

19世紀以降、「人種」をめぐるさまざまな問題は、人間社会に深刻な影響を与えてきた。今日においても、今この瞬間においてさえ、どこかで「人種」をめぐる紛争や争いは起こっているのである。それゆえ「人種」や人種主義に関する研究は枚挙にいとまがない。例えば、イギリスという文脈に限ってみても、1980年代頃からのマイルズ (Robert Miles) による一連の研究¹⁾があり、90年代以降もソロモス (John Solomos) やバック (Les Back) らによって人種主義研究は盛んに行なわれてきた²⁾。それに対し、反人種主義を考察の中心に据えた研究は驚くほど少ない。もちろん、ギルロイ (Paul Gilroy) による先駆的な研究³⁾はもとより、イギリスではボネット (Alastair Bonnett)、フランスではロイド (Catherine Lloyd) などが精力的に反人種主義研究を行なっているが、人種主義研究の成果とは比較にならないであろう。こうした背景のひとつには、克服されるべきなのは反人種主義ではなく人種主義であるとか、反人種主義は人種主義への単なる対抗であるといった認識があると思われる。こうした点を鋭く批判し、ヨーロッパにおける反人種主義をその起源から問い直した本書は、反人種主義研究の数少ない成果のひとつであると言える。著者のアラナ・レンティン (Alana Lentin) はフィレンツェのヨーロッパ大学研究所で博士号を取得し、現在はオックスフォード大学でリサーチフェローを務めている。著者はまた、反人種主義運動の活動家としても知られている。以下、章ごとに本書の内容を見ていくことにする。

はじめに (はじめに一反人種主義、社会学、政治学) においてレンティンは、人種問題を考えるうえで、反人種主義の考察は不可欠であるにもかかわらず、人種主義研究に比べ反人種主義研究が十分なされてこなかった一因には、反人種主義が人種主義に対する単なる抵抗・反応であると捉えられてきた背景があると指摘し、そのため反人種主義を歴史的・社会的観点から考察する視点が欠如してしまっていると主張している。そこで本書は、反人種主義を人種主義と切り離すことなくその起源から考察し、西ヨーロッ

¹⁾ *Racism and Political Action in Britain*, Routledge and Kegan Paul, London/Boston 1979., *Racism & Migrant Labour*, Routledge and Kegan Paul, London/Boston 1982. など。

²⁾ 両者が編者を務めたものとして、*Theories of Race and Racism*, Routledge, London 2000. がある。

³⁾ *'There ain't no Black in the Union Jack': The Cultural Politics of Race and Nation*, Hutchinson, London 1987.

パの政治領域における反人種主義言説の位置や、反人種主義運動の実践の場はどこか、といった問題に答えることを主要な目的としているのである。

第一章（「人種と国家」—ヨーロッパの近代と「人種」の政治的概念）では、近代の現象としての人種主義の台頭に着目し、「人種主義と人種的抑圧のプロセスは、民主主義的な西ヨーロッパの国民国家の政治哲学とは相反する」（pp.10-11）という一般的な言説の整理とその批判的分析を行なっている。19世紀の終わりまでの西ヨーロッパにおける国民主義的プロジェクトにおいて、国民社会の根本的な構成上の原則として「人種」というツールが用いられた。こうした「人種」概念の政治的な道具化は、普遍主義の革命的理念がもたらした平等主義に起因していたが、逆に人間集団の差異をも強調させた。さらに、同化主義、もしくは「文明化の使命」という名のもとでの支配は、「ユダヤ人」や「黒人」などを人種化し、進化のヒエラルキーを創り上げた。こうした過程においては、「人種」という概念が彼らの根本的な存在理由であった。つまり、人種主義は、民主主義的な西ヨーロッパの国民国家の政治哲学と相反するのではなく、逆にそれに支えられて発展したのである。

ナチスによるホロコーストの実態が明らかになるにつれ、西ヨーロッパでは人種主義を否定・批判する取り組みがなされていった。こうした第二次大戦以降の反人種主義の主たる言説とそれに依拠した取り組みを再検討したのが第二章（人種主義を解明する—文化と国家の間の反人種主義言説）である。とりわけ、バーカー（Martin Barker）やバリバル（Etienne Balibar）の議論⁴⁾に依拠しながら、ユネスコによる反人種主義の取り組みと、そのユネスコに論文『人種と歴史』（1952年）を寄せたレヴィ=ストロース（Claude Lévi-Strauss）の議論、いわゆる「文化相対主義」を批判的に検討している。著者によれば、ユネスコとレヴィ=ストロースの議論の主要な問題点は、「人種」と「文化」を交換可能（interchangeability）な概念として提示しているところにある。レヴィ=ストロースが唱えた「文化の差異の尊重」という言い回しは響きよく聞こえるが、それは容易に「文化」の違いを根拠にした人種主義に転化されうるものであり、実際に、この「差異主義（文化主義）的人種主義」を掲げた極右政党が、ヨーロッパ諸国で台頭していくことになった。

つづく第三章（反人種主義の例証—フランス、イギリス、アイルランド、イタリア）では、社会問題としての人種主義と反人種主義の政治運動化の四つの事例をとりあげて考察している。フランスやイギリスは、かつての植民地支配と、戦後その旧植民地からの移民の増加が人種問題の深刻化と深く関わってきた。それゆえ反人種主義が比較的盛

⁴⁾ Martin Barker, *The New Racism: Conservatives and the Ideology of the Tribe*, Junction Books, London 1983., Etienne Balibar / Immanuel Wallerstein, *Race, Nation, Class: Ambiguous Identities*, verso, London/New York 1991.

んである一方で、人種主義の複雑化・多様化にも直面している。一方、アイルランドはかつての移民していく社会から、移民が入ってくる社会へと変わりつつある。反人種主義は移民先での問題ではなく、当座の、まさにアイルランドという場での問題となっている。そしてイタリアでは運動としての反人種主義そのものが根付かないという問題を抱えている。反人種主義は国によって様々な特徴があるが、この章の目的はこうした四つの事例の単なる比較ではない。ここで考察されたそれぞれの人種主義は一国史的な枠組みではなく、ヨーロッパという政治構造のなかで捉えていかなければならないのである。また逆に言えば、こうした個々の事例の分析は、より広範な、つまりヨーロッパレベルでの反人種主義の構築に不可欠なのである。

第四章（公共政治文化としての反人種主義）の考察対象は、1990年代初めごろから、タギエフ（Pierre-André Taguieff）やギルロイ（Paul Gilroy）らによって指摘され始めた反人種主義の危機、あるいは陥穽である。フランスの「伝統的な思想」である「平等」や「普遍」に基づいた同化主義的反人種主義は、容易に人種主義へと転化しえたとし、逆に80年代に見られた差異の強調もまた、文化的な差異に基づく人種主義（差異主義的人種主義）を生むだけであった。一方、1970年代後半のイギリスでは、反ナチ同盟を中心に反人種主義運動が展開されたが、その際、移民排斥を訴える国民戦線を批判する戦略として、同党を「ファシスト」、もしくは「ナチス」と呼んだ。このようなやり方は人種問題を周縁化するだけでなく、第二次世界大戦時にみられたような「反ファシズム」によるイギリスのナショナリズム高揚につながるものであった。これらの指摘からわかるように、「国民の伝統」や「歴史的遺産」に頼った反人種主義は、必然的に移民やエスニック・マイノリティを排除してしまうだけでなく、さらに人種化・人種主義のプロセスとしてのヨーロッパの歴史そのものを見落とし、無批判のままそれを繰り返す危険性を伴うのである。

最後の第五章（誰が、何を、誰に向かって、どこから語るのか？—反人種主義と政治的表象）において著者は、今日の反人種主義運動の問題性を三つの二元論を軸に分析している。一つ目は、理想や本質を掲げるか、または人種主義による実際の、そして潜在的な犠牲の生きた経験を反人種主義の基礎とするかという「真正性か経験か」という問題、二つ目は反人種主義団体と国家組織との関係性に絡む「権利か独立か」の問題である。最後は地域に根ざしたものか、国民国家の枠組みを超えた（とりわけヨーロッパレベル）ものを目指すのか、つまり「ローカルかグローバルか」という問題である。著者は反人種主義の活動家たちはEUやグローバリゼーションという問題にあまりに鈍いと訴える。いずれの場合も二者択一の問題でもなければ、単なる折衷の問題でもない。重要なのは運動の連続性を可能にする関係を築いていくことなのである。

そして結論（反人種主義の未来—デジャビュか、もしくは未知への旅か？）における著者の指摘によれば、人種化された「よそ者」への敵意がますます顕著になっている今日のヨーロッパの政治状況を考えると、ヨーロッパにおける人種主義の歴史は新たな段階に入ったという。こうした状況を打開するためには、まずヨーロッパの人種主義と反人種主義の歴史に目を向けなければならない。人種主義の批判的な考察はこれまで数多く行なわれてきたが、一方で反人種主義はほとんど中心的に扱われることはなかった。しかし人種主義と反人種主義が表裏一体の関係である以上、両者の起源や支柱となっているものを再考することが、反人種主義の可能性と新たな道を探る一助となるのである。

以上が本書の概要である。ここまでみてきてわかるように、反人種主義とはそれだけで独立して存在するものでもなければ人種主義の単なる対抗でもない。ヨーロッパにおける人種主義と反人種主義はその起源から常に表裏一体の関係にあり、そこには近代以降のヨーロッパ政治思想・哲学が大きく影響してきたのである。しかし、人種主義を生んだヨーロッパという場で反人種主義を訴えるということの意味、つまり人種主義を生んだヨーロッパ政治思想で反人種主義を語れるのか、というジレンマにどう答えていくのかという問題は依然として残されている。また、著者が指摘するように、今後ますます世界規模での人口移動が活発化する中で、グローバルな反人種主義運動が必要とされるだろう。しかしその際、「人種主義を生んだヨーロッパには反人種主義の使命がある」という認識のもとでグローバルな運動を形成しようとすれば、ヨーロッパによるヨーロッパのための反人種主義、もしくは植民地主義の二の舞になりかねない。「グローバル」という言葉に踊らされることなく、ヨーロッパという枠組みとの関係を考えていかなければならない。

ともあれ著者自身も示唆しているように、「人種」が様々な影響を与えながら現代社会を生き続ける限り、「人種」は常に問題視され続けなければならないのは間違いないだろう。

（稲垣 健志*）

* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程